



建築物を一つ一つ調査し、観光資源としてどう生かすか考える



美しい丘の町、サルト市



住民に聞き取り調査を行い、町中に眠る「お宝」を探す



ヨルダン在住の日本人を対象に企画した観光ツアーを通して、まちじゅう博物館の問題点などを検討した



サルトの町を歩き、フィールド調査を行う短期ボランティアの学生たち。それぞれの得意分野を生かすことで、活動の幅も広がった

まちじゅう博物館を実現させるためには、サルト固有の文化、歴史、自然などを、実際に見て調査し、把握することが必要だ。西山教授は「いつも大学でやっているように、学生と一緒に活動できないか」と考えた。そこで、一般公募のあった青年海外協力隊への応募を研究室の学生に

### 学生ボランティアがフィールド調査を実施

教授に白羽の矢が立った。07年7月、初めてサルトを訪れた西山教授の第一印象は「メッセーj性の強い町」。生活の中に有形・無形の文化遺産がうまく融合していたという。一方で「住民が自分たちの町の魅力に気付いていない。文化や遺産を守るという意識があまりないように感じた」。西山教授は、まずはまちじゅうにかけかわる人々への意識づけが必要と考え、自治体、政府、NGO、各国の支援機関、国内研究者などの関係者を集めてワークショップを開催。ヨルダン観光遺跡省とも話し合いを重ね、町全体を博物館に見立てる「サルトまちじゅう博物館」構想を固めていった。

7月から2カ月間活動した赤星真弓さん(修士1年)と松原まりなさん(学部4年)は、現地NGOに所属して、地域資源調査に精を出した。「旧市街を駆け回り、サルトの魅力を感じながら活動できました」。

提案。選考の結果、西山研究室を含む国内大学から8人が、短期ボランティアとして派遣されることになった。期間は2〜6カ月。各自の研究テーマ、専門性を生かし、08年4月より順次フィールド調査を始めた。西山研究室の村上佳代さん(博士1年)は、08年4月から6カ月間、行政関係者とともに具体的な計画づくりに取り組んだ。「秋まちじゅう博物館」を研究テーマとする彼女は、「秋でのフィールド調査、研究を生かすことができた」と言う。エコミュージアムセンター※の設計を行った窪崎喜方さん(博士3年)は、元フィジカの建築隊員。協力隊OBである彼の存在は、ほかの学生たちにとっても心強かったようだ。



日本からは、飛行機でヨーロッパ、東南アジア、アラブ諸国のいずれかを經由して首都アンマンへ。そこからサルトまではバスで約30分。

※サルトの観光スポット、「サルトまちじゅう博物館」の回り方などを、訪問者に説明するための情報センター。円借款で改修された「サルト歴史博物館」に併設される予定。

# PLAYERS

国際協力の担い手たち



JICAのサルト市観光開発支援に協力する西山教授と研究室の面々

## サルトの町の魅力を伝えるために

ペトラ遺跡や死海など、豊富な観光資源を有するヨルダン。JICAは、九州大学芸術工学研究院・西山徳明教授と協働で、中西部サルト市の観光開発に取り組んでいる。

中東諸国の中で、石油などの産業資源に乏しいヨルダン。海外への出稼ぎや国際社会の援助に頼らざるを得なかったが、経済発展を担う産業として観光が台頭しつつある。JICAは1994年に同国の観光開発支援を開始。99年からは円借款により、博物館の整備などを複数の都市で行ってきた。首都アンマンから車で30分、ヨルダンの古都として知られるサルト市もその一つだ。ヨルダン渓谷のそばにあり、3つの丘に囲まれた同市は、今もなお、丘の斜面にオスマン帝国時代の建造物が連なり、独特の趣を放っている。ここでは「アブ・ジャールベルの家」と呼ばれる古い商館を博物館に改修したり、周辺の道路を整備したりする支援を進めてきた。2007年には、町の特徴を最大限に生かすため、住民参加型の観光開発支援を開始。その協力者として、山口県萩市、沖縄県竹富島など、日本の地域観光開発において実績を持つ、九州大学の西山徳明

### サルトの町を「まちじゅう博物館」に